

よい施術者の必須条件「相手を思いやれる人」

よい施術者の定義は一樣ではありません。患者さんの病態を正確に把握できる人、高い治療効果を出せる人…、もちろんどれも必要な要素です。



しかし何よりも、様々な愁訴（しゅうそ）をお持ちの患者さんに対し、思いやりを持って寄り添える人であってほしいと思います。

患者さんといえども、だれとでも気が合う人、だれにでもやさしい人ばかりではありません。これは臨床の現場に限った話ではありません。

近年、「多様性」という言葉が多く取り上げられています。患者さんに限らず、他者を思うとは、その多様性を乗り越えなければならないものです。考え方や言動、態度などの「違い」を受け入れ、どのように接するのかが問われるのです。特に理解して欲しいのは、その「違い」は一方だけにあるわけではないということです。相手の言動や態度に傷ついた時は、怒りをあらわにする前にひと呼吸おいて、自分の言動や態度が相手を傷つけていた可能性を考えることが大切です。相手を傷つけた可能性を感じたならば、言葉に表して謝ることが大切です。このような施術者が、周囲に信頼されるのではないかと思います。

社会とは、気の合う人ばかりで構成されているわけではありません。むしろその逆です。苦手な患者さんを見無視したり、口論したりする医療従事者はいてはなりません。

高等部保健医療科・専攻科の皆さんは、医療に従事する人になります。他者とのより良い関わりあいを、今から見直しておくことが、国試を目指す前の重要な課題となるのではないのでしょうか。人はいくつになっても人間関係の中で成長していく生き物です。